JWUシーズ

※＝入力必須項目

研究者名※	小川　洋子 OGAWA　Yoko	学位※	博士(心理学)
所属※	人間社会学部 心理学科	職名※	助教
連絡先	ogaway@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/ogawa_y		
研究分野※	臨床心理学、教育心理学		
研究キーワード※	親子関係、自己・個人内過程		
共同研究・競争的資金等の研究課題			
社会貢献・産学官連携活動等	横浜家庭裁判所川崎支部研修会「子どもが経験した面会交流－継続した交流と中断した交流－」2020年12月 横浜家庭裁判所研修会「子どもが経験した面会交流－継続した交流と中断した交流－」2021年12月 横浜家庭裁判所川崎支部研修会「子どもにとってよりよい面会交流とは何か」2022年2月		
受賞歴	日本家族心理学会研究奨励賞(2021年)		

研究領域	臨床心理学・教育心理学・親子関係	(SDGs)
研究テーマ※	思春期以降に面会交流を経験した子どもが別居親と離れていくプロセスに関する質的研究	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	【研究の背景・目的・内容】 面会交流とは，離婚後又は別居中に子どもと別居親が会って話をする，一緒に遊ぶなどして交流することである。日本では，半数以上の親子が面会交流を実施しておらず，中断率も高い。面会交流の有無及びその交流内容が子どもに影響を与えることは繰り返し提言されている。一方で，実際に子どもが面会交流をどのように体験し，どのような心情を辿っていくのか，具体的なプロセスに着目した研究は少ない。本研究では，思春期以降に面会交流を経験しているが現在は交流を中断している子どもにインタビューを行い，子どもはどのようなプロセスを経て別居親と離れていくかについて検討を行った。 その結果，思春期以降に面会交流を経験した子が別居親と離れていくプロセスには，《面会交流をすることで，どちらの親との関係性にも距離を感じる》経験がまず存在することが明らかとなった。この経験は，子どもが，①面会交流をすることで両親間の紛争に巻き込まれ，②面会交流の前後に日常と異なる同居親の対応に同居親との距離を感じ，③実際の面会交流では期待していた対応を別居親にしてもらえず別居親とも距離を感じる，といった経験であった。こうした経験によりさまざまな感情が子どもの胸に去来するが，その感情を吐き出す場所がないことが子ども達を更に追い詰めていると考えられた。面会交流中断の最終的なきっかけは，①子どもが我慢の限界を超える，②別居親から急に関係を断ち切られる，③別居親の自分への関心が弱くなったように感じると共に自分の生活も忙しくなり，自然消滅的に面会交流が中断する，と異なっていたが，中断前の背景には《面会交流をすることで，どちらの親との関係性にも距離を感じる》という共通した経験があることが明らかとなった。 【応用例、研究の展望】 研究内容を面会交流支援に役立ててもらうための広報活動として，2020年より家庭裁判所で研修会を行っている。今後も離婚後の子どもの心情に着目した研究を行っていきたいと考えている。 【研究方法の特色】 M-GTA	
本研究関連特許・論文等	・小川洋子(2018). 子どもが面会交流を通じて別居親と新たな関係性を築くまでのプロセスに関する質的研究　家族心理学研究, 32(1), 14-27. ・小川洋子(2021). 思春期以降に面会交流を経験した子どもが別居親と離れていくプロセスに関する質的研究　家族心理学研究, 34(2), 111-126. ・小川洋子(2021). 思春期前まで面会交流を経験した子どもの別居親像形成のプロセスに関する質的研究　日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 27, 41-54.	
共同研究・外部機関との連携への期待		